

日本中国語学会 第60回全国大会を開催して

松 村 文 芳

2010年11月13日（土）、14日（日）の二日間、神奈川大学の16号館2階セレストホールと23号館の1、2階で日本中国語学会第60回全国大会が開催されました。

大会は日本中国語学会事務局（京都大学文学研究科中国語学中国文学研究室内）、大会運営委員会（委員長：岩田礼金沢大学教授他10名）、大会準備会（代表：加藤宏紀神奈川大学准教授）で構成される大会本部を中心に実施されました。

大会は11月12日（金）に開催された理事会を皮切りに13日（土）の評議会、開会式、学会奨励賞授与式に続き、午後13：15から16：45まで「中国言語学の新潮流」と題したシンポジウムを三名の招待講演者により挙行了しました。

最初のスピーカーはスタンフォード大学の孫朝奪教授で「現代漢語把字句的形成」と題して、現代中国語の処置構文の成立を『祖堂集』や『朱子語類』等の歴史資料のデータを根拠に説得的に論じました。

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校のJerome Packard教授は第二講演者として言語学的認知科学的方法論にもとづき "The Morphology of Chinese" を中国語の単語は統語論記述をベースにしたものではなく、"the bound-free and function-content identities"によって記述されるべきであ

ると主張しました。Packard先生は英語で講演されましたので通訳は神奈川大学英語・英文学科の佐藤裕美先生にお願いいたしました。

第三講演者は中国社会科学院哲学研究所論理学研究室主任の鄒崇理教授で、「自然言語の形式意味論のいくつかの研究モデル」、と題して、研究モデルを「言語学をベースとした研究モデル」、「伝統的論理学に準拠した研究モデル」、「論理学と言語学を総合した研究モデル」に分けて詳しく紹介し、中国語に適用して論じました。

孫朝奪教授の講演は中国歴史言語学に新鮮なアイデアを提供し、Jerome Packard 教授は中国語形態論にユニークな、また盲点をつく手法をもたらし、鄒崇理教授は論理学者の立場から、現代中国語の意味研究に重要な指針を与えてくれました。この日はまたポスターセッションが七名により実施されました。

大会二日目は23号館で9：30から六会場を使用し、一会場あたり11名の発表者による研究発表が行われました。

第一会場は午前・午後共に音韻部会、第二会場は午前・午後共に歴史語法部会、第三会場は午前が教育部会、午後が現代語法部会（1）、第四会場は午前が現代語法部会（2）、午後が現代語法部会（3）、第五会場は午前が現代語法部会（4）、

午後が現代語法部会（５）、第六会場も午前と午後
にそれぞれ現代語法部会（６）、（７）の分科会
に分かれて、研究発表と活発な質疑応答が行われ
ました。

開催校の神奈川大学からは彭国躍教授が第４会
場の現代語法部会（２）において「現代中国語の
色彩語とメタファー ― 下位概念化の認知意味論
的考察 ―」と題して発表を行い、また外国語学研
究科中国言語文化専攻博士後期課程院生の鈴木進
一氏が「大陸と台湾における指示詞の対照研究 ―
"這・那" の距離認識の相違について ―」というテー
マで研究発表をしました。

大会開催にあたっては大会準備会を計八回にわ
たって開き、中国言語文化専攻の言語部門担当の
三名の教員と博士前期・後期課程の大学院生の献

身的な協力のもと、中国語学科ゼミ生多数の支援
を得て、二日間にわたる会場案内、参加者受付、
クローク荷物預かり、懇親会受付、研究発表六会
場におけるタイムキーパー、プロジェクタ使用補
助等の業務を無事こなすことができました。

今回の大会開催と同時にＡＰＥＣの会場が「み
なと未来」に設定されたため、宿泊できるホテル
が不足しましたが、開催校代表である加藤宏紀先
生の機転で早めに手配したため、何とか切りぬけ
られました。また加藤代表は招待講演者三名の航
空券の手配、宿泊場所の設定予約、大会予稿集の
作成から会計処理までのすべてを超人的に処理し
てくれました。同氏の御尽力により全国大会が大
きな成功を納められたことをここに特記して、開
催報告といたします。

学会報告

言語学関連学会の参加報告

彭 国 躍

・第141回日本言語学会

11月27日（土）と28日（日）に東北大学で行
われた日本言語学会に参加した。一日目の研究発
表会の司会を担当し、その前後にいくつか興味
のある発表を聞いた。今回の大会発表には「事象
関連電位」、「ERP波形」、「脳内メカニズム」な
のような術語が目立ち、文・理間の学際研究が進
んだことを肌で感じた。脳電図と測定数値を前に
発表内容を懸命に理解しようとする参加者の真剣
な姿が印象に残った。二日目（28日）にはシン
ポジウム「脳科学と言語学の対話」があったが、
学内入試業務のため残念ながら参加できなかった。

・第13回日本語用論学会

12月4日（土）と5日（日）に関西大学で行わ
れた日本語用論学会に参加した。初日は、アス
トン大学のMalcolm COULTHARD教授による特別
講演会「The Official Version: on the relation be
tween what was said to the police and what
was officially recorded」が行われた。実例分析
を通して、イギリスの法言語学における新しい
研究動向が紹介された。質疑応答の時に、イ
ギリスでは言語学者がどのようにして司法関係
者とコンタクトを取り、情報や意見の交換をし
ているのか

という質問に対して、イギリスの警察や裁判官は比較的謙虚に言語学者の意見に耳を傾けてくれるという教授の答えに、会場では「お～」という関心と驚きの声があがった。日本では裁判関係の資料を言語学者が直接分析し、ましてや研究発表す

ることはきわめて困難なことを会場の方々がよく知っていたからであろう。二日目は研究発表会分会の司会を担当し、いくつかの発表に参加した。今回の学会参加は大変勉強になった。

英独仏合同シンポジウム

「CEFRの日本への文脈化を考える」(於早稲田大) を聴講して

小 林 潔

2010年8月20日(木)、日本独文学会ドイツ語教育部会・日本フランス語教育学会・大学英語教育学会の(第1回)英独仏合同シンポジウムを聴講した。テーマはCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)の日本での応用、すなわち「文脈化」である。内外のCEFR促進の中心人物が登壇した。

- ・David Newby(グラーツ大学)「CEFR, ELP, EPOSTLのヨーロッパへの文脈化を考える」
- ・西山教行(京都大学:仏語教育)「日本における「言語教育学」の成立の課題と展望—『ヨーロッパ言語共通参照枠』からの発想と展開」
- ・平高史也(慶應義塾大学:独語教育)「日本における『ヨーロッパ言語共通参照枠』の受容—ドイツ語教育と日本語教育を例に—」
- ・久村研(田園調布学園大学:英語教育)「EPOSTLの文脈化について」

Newby教授は教員養成ポートフォリオの作成者である。講演では、CEFRの言語学習者観・言語観、ELP(European Language Portfolio)の権能、語学教育実習生のためのEPOSTL(European Portfolio for Student Teachers of Languages)

の特長が解説された。即ち、学習者は言語使用者・生涯学習者・社会的行為者である(各々、行動中心主義・学習者自律・複言語主義/異文化認識に対応)。CEFRは発話と運用に力点を置いており、運用中心の評価とは学習者のスキルを発達させるという謂で、更なる責任が教師に課せられるという。西山教授は日本のCEFR推進者と言って良いが、報告ではあえて負の側面(移民選別の道具となるなど)を指摘した。平高教授は、教材に関したCEFR応用の困難、国士舘大学英独仏中日5言語ポートフォリオでのCEFR応用の試み(CEFR6段階を10段階に細分化)、国際交流基金の日本語教育スタンダードと「東アジア共通参照枠」の可能性を論じた。久村教授はEPOSTL日本版の翻案者であり、プロ教師育成のためのリフレクティブ・アプローチ/プラクティス(教師同士の相互批評・内省・実践・改善)を提唱した。

神奈川大学のロシア語教育に於いても堤正典教授と筆者とでCEFRを利用した非専攻課程習得基準策定に取り組んでおり、他言語プロパーでの議論は参考になるところである。次回2011年3月18

日開催予定の「CEFRの文脈化を図る」にはロシア語教育関係者も参加予定である。また、本シンポの中心メンバーにより来年度に向けた科研費応募（代表は西山教授）もなされ、更なる展開もはかられている。この「新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で利用できる共通言語教育枠の総合研究」には筆者も連携研究者として関わるが、採択の成否に拘わらず、このような文脈化へ

の取り組みは今後も活発になるであろう。一方で、ロシア語教育／学習の初期段階にあっては行動中心主義を制限せざるを得ないという見解や、翻訳等の媒介能力がCEFRの想定以上に必要との見方（堤教授及び大阪大林田教授日本ロシア文学会報告（2010年11月6日於熊本学園大））も現状を正しく把握したもので、個別言語の特徴と日本での位置を見据えた議論も更に必要である。

言語研究センター共同研究

モダリティ研究：— 言語の個別性と普遍性 —

佐藤 裕美

本共同研究グループがテーマとしているモダリティとは、話者の命題についての態度が言語表現を介して表出したものであると考えられるが、命題の構造的考察を中心に展開してきた統語論の研究が、近年、文の語用的機能も含んだ構造構築へと進展するのにもとない、意味論、語用論、情報構造などの関連する分野とのインターフェースの研究も重要になってきた。この共同研究グループは、メンバーそれぞれの研究領域におけるモダリティの捉え方や分析について研究成果を交換し、また異なる領域との接点について議論する機会となっている。また、英語、中国語、韓国語、ロシア語、スペイン語、日本語を含む様々な言語の12名の研究者からなるグループであり、個別言語研究はもとより、モダリティに関わる言語の普遍性についての洞察が深められること、そして、得られた知見を言語教育に応用し貢献することを期待している。

今年度の主な研究テーマは、モダリティ研究と

言語教育であり、7月にはこのテーマで、アンドレイ・ベケシュ氏（リブリャーナ大学教授）、砂川有里子氏（筑波大学教授）、黒沢晶子氏（山形大学教授）をお招きし、ワークショップを開催した。講演・研究発表7件に加え、学内外からの参加者による活発な討議が行われ、モダリティと言語教育の関係だけではなく、教育現場から得られるデータが理論研究にとっても示唆に富んだものであるという意味においてもたいへん有意義な機会であった。

さらに、今年度はこれまでに、文彰鶴氏による文末形式についての日本語／韓国語の対照研究の発表を中心とした研究会も開催している。また、過去2年間のモダリティと語用論、モダリティと統語論をテーマにした研究成果を言語研究センター叢書第1号として刊行する準備を現在進めている。

『良友』画報とアジア研究

孫 安 石

本共同研究は1926年～1945年の間、上海で発行された『良友』画報の多様な内容を、専門領域を超えた学際的な視点からとらえ直すことを目指すものである。上海で発行された『良友』画報に関する研究成果としては、1930年代に同雑誌の編集を担当した馬国亮が出版した『良友懐旧』（2002年、三聯書店）が最新の先行研究である。しかし、中国以外の国ではまだこの画報を全面的に分析した研究は発表されていない。

1926年に創刊された同雑誌は、中国の政治、経済、社会、文化はもちろん、文学、広告、漫画などあらゆる分野を網羅している。とくに、この画報が創刊された1920年代はアジアで大衆消費社会とも言えるべき社会現象が幅広く見られた時期で、

映画や百貨店などが登場する時期とも重なる。本共同研究はこの『良友』画報を精読する輪読会を続けながら、2004年8月にはワークショップ「『良友』画報と上海」（上海）を開催し、2007年9月には雑誌『アジア遊学』に『良友』を取り上げた特集号（勉誠出版）を出版することができた。

本年度は2010年1月に菊池敏夫「上海の百貨店業界と近代中国」（臨時研究会）を開き、8月には上海師範大学の都市文化研究所、上海市檔案館、上海市図書館などを訪れ、『良友』画報関連の資料調査を行うことができた。来年度は上海現地でワークショップを開催するほか、言語センターの叢書刊行に向けて研究活動のさらなる活性化を期したい。

「ロシア語習得基準の研究 新しいロシア語 習得基準策定のための諸問題の検討」活動報告

堤 正典・小林 潔

神奈川大学という現場を常に念頭におきながら2本の関連する学会報告を行った。

- ・小林潔・堤正典 「ロシア語教材を見直す―非専攻課程習得基準の策定を念頭に―」ロシア・東欧学会／JSSEES 2010年合同研究大会（2010年10月24日於天理大学）。

- ・堤正典・小林潔 「非専攻課程ロシア語教育を考える ― 習得基準・言語政策・IT ―」日本ロシア文学会60周年記念大会（第60回全国大会）（2010年11月6日於熊本学園大学）。

天理大での報告は神奈川大で用いている初修教科書をCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）とい

う通言語的な枠組みのうちに位置付けようとするものであり、熊本での報告はカリキュラムの見直しをしつつCEFRの行動中心主義と現場の教育との兼ね合いを論じたものである。

我々の習得基準策定に活かすべく内外のCEFR応用の情報収集や準拠教材のフォローもしている。日本独文学会ドイツ語教育部会・日本フランス語教育学会・大学英語教育学会の（第1回）英独仏合同シンポジウム「CEFRの日本への文脈化を考

える」（2010年8月20日於早稲田大）や日本ロシア語教育研究会の「サマーセミナー2010」（2010年8月21日於大阪大学）および「ロシア語教育研究集会2010」（2010年12月5日於大阪大学）などの学会に参加・聴講した（これらは他プロジェクトにも関わる）。

以上をふまえ現在、今年度版のロシア語習得基準をとりまとめ中であり、今後も検討を重ねていきたい。

言語研究センター共同研究

スペイン語の中間言語と第二言語の習得について

アルトゥーロ バロン ロペス

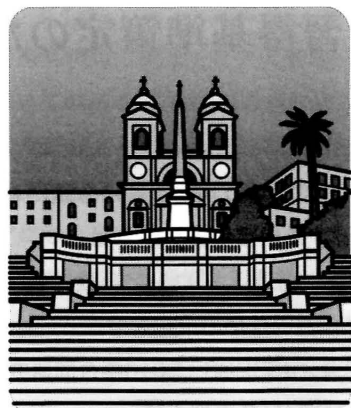
2010年の春、我々のグループは再度集まり、新入学生を対象にした、学習志望動機に関するアンケートを準備した。

アンケートは5月と10月に実施した。その結果は今後、分析する予定である。同時に文法の理解度に関するテストも行った。

アンケートとテストの結果により、研究対象の学生をレベル別の3つのグループにわけ、それぞれのグループの学習習得度、対象言語に対する動機と興味の変化の分析を行う。

これらの研究は入学時から卒業までの4年間を通して続けられる。

2011年度の研究目標は、まず2010年度の研究結果の分析をし、レベル別の3つのグループに対する新たな調査を実施することで習得度合いを測るつもりである。



大学での学習研究活動を支える日本語能力の分析

富谷 玲子・高木南欧子

近年、仲間と意見を交換し、知識やストラテジーを共有しつつ学習を行う学習方法についての研究が盛んとなり、教材なども出版されるようになってきた。本研究では、このような学習形態を「協同学習」と呼んでいるが、この学習方法では、学習過程における相互行為の中で個々の理解が深まり、新たな意味理解への発展が促されると考えられている。本研究においては、このような学習において行われる学習者の発話の実態を分析することを目的とし、教育活動への応用、カリキュラムの開発を目指している。

学習中の発話を観察した結果、活発な発話が続

く場面と、逆に沈黙が続く場面とが見られたが、学習者によって、発話、および沈黙へのかかわり方は様々であり、学習中の沈黙も様々な解釈が可能であることが分かった。これらのことは、協同学習の一形態である「ピア・リーディング」や「ピア・ラーニング」が広い知識や創造が要求される課題において有効だと言われていることと関連があると思われる。現在、さまざまな機関で学習者コーパスが整備されているが、今後はこれらとの比較なども行い、さらなる実態の解明をめざしていきたい。

韓国語の漢語動詞の受身文のデータの整備

尹 亨 仁・文 彰 鶴

近年大学における韓国語のレベルは非常に高くなっている。それを押し上げている要因として、韓国ドラマの影響、韓国への旅行、韓国人との交流、韓国への短期留学などが挙げられる。

こういう変化の中で、韓国語を履修している学生を悩ませている大きな問題の1つが韓国語の受身文である。韓国語の受身文は3つの方法、7つの接辞の付加によって作られる。7つの接辞の付加は、本動詞の語種（固有語か漢語か）、統語的特

徴（2項動詞なのか、3項動詞なのか）、さらに意味的特徴（被害を被るという意味を帯びているか否か）などによって分かれるなど、その派生は複雑な様相を呈している。そのため、「子どもに泣かれる」「近所の人に騒がれる」「息子に死なれる」など、自動詞文でも受身文を作ることができる日本語の環境の中で育った日本語母語話者にとって韓国語の受身文を理解、使いこなすということは至難の業である。

日本語と漢語語幹を共有する漢語動詞の受身文の場合は、語幹に「-되다(doeda)」・「-받다(badda)」・「-당하다(danghada)」の3つの接辞が付加されるが、この3つとも付加できる場合と1つしか付加できない場合がある。このように、漢語動詞によって受身接辞が異なるため、典型的な動詞を用いて説明するだけではその違いが学生に十分に伝わらない。そのためには、全体の傾向がつかめるリストを見せながら説明を試みた方が効果的であると思われる。

現在、『デイリーコンサイス韓日・日韓辞典中

型版』（三省堂、2010）を参考に「頻度の高い韓国語の漢語動詞」のリストを作っている。「頻度の高い漢語動詞」を選ぶ作業として、韓国で最も読まれている文学賞作品集の『李箱文学賞受賞作品集』の2001年から2010年までの10年間の作品に目を通し、用いられている漢語動詞を拾い上げている。2011年3月までに、500語くらいの漢語動詞のデータが整備される見通しである。頻度を3段階に分ける、構文情報も入れるなどして、2011年度の韓国語の中級および上級の授業で活用できるようにしたい。

言語研究センター共同研究

中国語初級リスニング自動学習システムの構築

加 藤 宏 紀

2010年3月から新しい漢語水平考試（HSK）が実施された。本研究グループはまず関連書籍を取り寄せ、1級と2級（初級・基礎レベル）の聴力試験について、使用語彙や出題形式などの傾向を分析した。

1級を例に紹介すると、出題形式は（1）図像と2～6語のフレーズからなる音声の内容との正誤判断、（2）約10語からなる音声の内容と合致する図像選択、（3）10語弱からなる発話に対しての約5語からなる質問の回答選択の3種類である。いずれの形式もキーワードとなる単語レベルの聴き取り能力が問われている。

今後は3級まで視野に入れ、使用語彙や出題形式の分析を進め、作問に必要な語彙・表現・文法項目の抽出作業に取りかかる。

また、同時にパソコンによる自動学習を行うためのプログラム作成に着手する。

